

読書のすゝめ

その 26

H 28

9 / 16

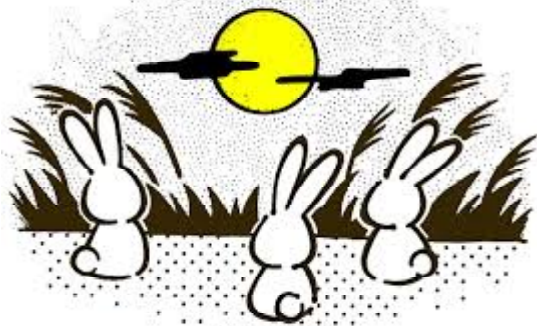
季節の移り変わり

〜重陽の節句

九月九日は五節句の一つ「重陽」で、菊に長寿を祈る節句です。「陽」とは奇数のことで陽数の中でも一番大きな「九」が重なる日のみ重陽といえます。中国では月と日に奇数が重なる日に不吉な物語をもつ故事があり、忌み嫌って邪気を払う行事がおこなわれました。九月九日については、後漢の有名な方士から「汝の家に災いあり」と忠告された弟子の桓景が、指示通りにして難を逃れたことから、「九月九日に茱萸の囊を腰に下げて高いところに登り、菊花の酒を飲めば災いを消し長寿になる」という風習が生まれ、これが奈良時代に日本に伝わったとされています。

日本でも邪気・悪気を払う節句として定着していきませんが、奇数の重なりはむしろ縁起の良い日として受け入れられているようです。「菊綿」「衣綿（きせわた）」は、菊の花に真綿をかぶせ、夜露がついた綿で身を拭うことで長寿（若返り）を願うことをしました。

五節句は宮中行事としてあったものが、江戸時代には幕府公式の行事として取り入れられ、また、子どもの行事として民衆の支持を受けたものに三月三日・五月五日の節句があります。



着せ綿・被せ綿・衣綿
(きせわた)

新着図書から

『陸王』 池井戸潤

（集英社）



池井戸潤 最新作
勝利を信じる。
足袋作り 百年の老舗が、ランニングシューズに挑む。

埼玉県行田市にある「こはぜ屋」は、百年の歴史を有する老舗足袋業者だが、その実態は従業員20名の零細企業で、業績はジリ貧。社長の宮沢は、銀行から融資を引き出すのにも苦労する日々を送っていた。そんなある日、宮沢はふとしたことから新たな事業計画を思いつく。長年培ってきた足袋業者のノウハウを生かしたランニングシューズを開発してはどうか。

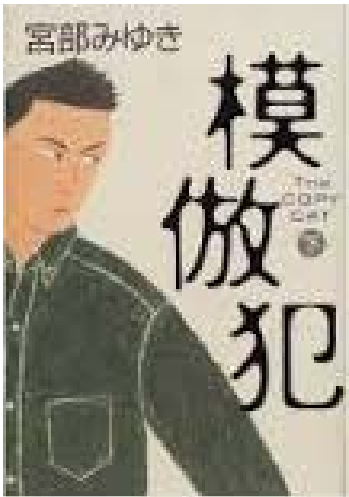
社内にプロジェクトチームを立ち上げ、開発に着手する宮沢。しかし、その前には様々な障壁が立ちちはだかる。資金難、素材探し、困難を極めるソール（靴底）開発、大手シューズメーカーの妨害――。

チームワーク、ものづくりへの情熱、そして仲間との熱い結びつきで難局に立ち向かっていく零細企業・こはぜ屋。はたして、彼らに未来はあるのか！

ドラマ化決定

（9月21・22日）

『模倣犯』 宮部みゆき（小学館）



物語は、墨田区の大川公園で女性の右腕とハンドバッグが発見されることから始まる。バッグは3カ月前に失踪した古川鞠子のものだとわかるが、テレビ局に犯人と名乗る人物から右腕は鞠子のものではないという電話が入る。さらに犯人はどういう考えか、鞠子の祖父に接触をはかる。しばらくして鞠子は白骨死体として見つかり、事件は複雑さを増していく――。

「天才」を自称する犯罪者の暴走を描いたサスペンス作品で、犯罪被害者・加害者双方の視点から一つの事件を描写している。完全犯罪を企てたつもりになっている犯罪者の愚かさや幼稚さ、それとは対照的な位置に生きる人々がのぞかせる優しさや器量の大きさを、そして犯罪被害者や加害者の家族が直面する地獄が描かれている。息苦しくも先が気になり、上下2巻（文庫では5巻）の長編ながら、いっしょに読んでしまおうこと間違いなし！

作品に取材者として登場する「前畑滋子」のその後『菜園』もおすすすめします。